

特集

ばれっとインターナショナル・ジャパン
(PIJ)

「スリランカ招聘

プログラム」

8月31日から2週間、スリランカ『サハン・セバナ』から2名の女性スタッフが来日し、グループホーム設立に向けての研修を受け入れました。今月号はその報告を掲載いたします。

PIJ 代表 相馬宏昭

PIJ 事業の一つ、1999年にスリランカにクッキーづくりの作業所(スリランカ Palette)を開設、10年間の活動の後、スリランカ大手菓子メーカーセイロンビスケット(CBL)の特例子会社サハン・セバナに Paletteのスタッフとメンバー全員を雇用していただいた経緯があります。

Paletteの時代から既に26年が経過、はじめから働いているメンバーとその家族が高齢化を迎えています。サハン・セバナの定年は50歳です。日本と比べスリランカの高齢化は早く、スリランカの平均寿命は77歳、日本と約7歳の差があります。一人親家庭もあり、グループホーム(GH)の必要性が高まってきています。

サハン・セバナを統括するCBLスタッフのアヌーシャさん、スリランカ Paletteで2008年からスタッフとして働き続けているチャミラさん(現サハン・セバナ所長)と、来日する4か月前からオンライン会議を開き、研修の目的とGHの概念、関係者に事前に質問する項目などについての準備確認作業を行ってきました。

8月31日(日)に成田に到着、移動途中おかし屋ばれっとの売り上げや材料費など、経済状況とスリランカの現状について情報共有をしました。スリランカも日本と同じくガソリン代が跳ね上がり、物価高騰が続いています。材料の値上がりも激しく、庶民の嗜好品であるクッキー売り上げは非常に厳しい状況です。

●インターンシッププログラムの目的

今回の研修に向け二人には目的を明確にすることと、GHの捉え方についてどのように考えているかまとめてもらいました。

*インターンシップの目的

- ・GHの概念を学ぶこと
- ・GHが如何に必要であるかを理解すること
- ・障がいのある方への支援を学ぶこと
- ・GH職員の役割と責任を学ぶこと
- ・スリランカでGHを設立・運営するために必要な知識と技能を習得すること
- ・GHの入居者およびその保護者の意見を分析すること
- ・ネットワークを構築すること

スリランカで考えるGHの必要性和日本とはその捉え方に違いがあることが見えてきました。日本のGHは、そこから職場に通うという、暮らしの選択肢の一つですが、サハン・セバナの親やスタッフは、仕事を定年退職した後の生活の場と考えていました。日本もひと昔前は、親亡き後の終の棲家(ついのすみか)としてGHを必要としてきましたが、若いうちからショートステイで体験し、親離れ子離れするために家族から距離を置き自立意識を高める目的に変わっています。

ばれっとホームだけではなく、多様なGHを見学することで、その人が求めるニーズに合った暮らし方の選択が用意されていることを感じ取ってもらいました。

●世田谷ライオンズ講演

9月3日、目黒雅叙園で世田谷ライオンズクラブの定例会で、サハン・セバナの活動紹介を行ないました。ぱれっとの会員でもありPIJ出張の際にはサポートをして下さっている栗原氏からのご紹介でした。事前にパワーポイント資料を作成し、日本語訳をしたペーパーを配布、二人にとっても大変貴重な機会となりました。サハン・セバナの理念・事業目的・目標・今までの成果を発表することができ、スリランカの障がいのある人々の社会的自立の実現に大きく貢献してきたことを改めて証明する機会となりました。

●「シブヤフォント」見学

「シブヤフォント」とは、障がいのある人とデザインを学ぶ学生との共創により、障がいのある方が生み出す独自性独創性のあるフォントやパターンを使用し、企業とコラボレートしながら新たな商品を生み出していく、それを一般化することでちがいをちからに変えていく街づくり、渋谷の未来像を描くプロジェクトです。彼らが創り上げたデータに付加価値を与え、福祉還元することで障がいのある人と社会との接点を創出します。

日本では各地に広まりつつありますが、スリランカにはそうした概念はまだなく、学校との協働によって障がいのある人の存在や理解を広めていくきっかけになります。障がいのある人々とともにアート、クラフト、デジタル印刷などに取り組む実践的な場を作ることで、企業やボランティアの協力があれば、このような仕組みはスリランカでも十分に実現可能だと感じたようです。

原宿スクエア（ハラカド）交差点にある「シブヤフォント」7F会場では、おかし屋

ぱれっと/工房ぱれっとが毎週金曜日に販売を行なっています。自分オリジナルのフォント作りを体験してきました。

●レクリエーションプログラム「GAYA」

幡ヶ谷社会教育館で月1回行なわれている、知的に障がいのある成人を対象とした「GAYA」を見学、実際にGHで生活されている方の余暇活動（交流・仲間づくり）を見学する機会が持てました。チャミラさんは2009年に一度ぱれっとに來日しています。その時に会ったメンバーと感動の再会ができました。クラブ活動や創作などの余暇活動の場として理想的であり、ボランティアや保護者の協力があり、行政の支援を受けて運営されている点など、サハン・セバナでも可能であると考えました。

●ぱれっと親の会との懇談会

実際に子どもがGHで生活している親との懇談会は大変貴重な時間となりました。生活しているの本人の変化や親の本音、GHに入っていない親の期待や不安など、直接話しを聞くことで温度感が伝わってきます。GHの必要性や自立について聞きたい質問事項を事前に回答してもらい、限られた時間内で中身の濃い話し合いができました。

共通する意見として、子どもが成長し自立を目指し親亡き後も地域で安心して生活する場としてGHは必要ということですが、入居のタイミングを決めるのに親子ともに心構えが必要のようです。GHで暮らしている親から率直なご意見を頂きました。

「一人でできることが増えて自信を持てるようになってきたこと。他者をサポートし他人に必要と思われることで、自尊心がついてきたこと。母親への大きな依存がなくなってきたこと。これらが子どもの成長につながっていると実感しています。」

●GH見学の感想 チャミラ・グナワルダナ

ぱれっと GHでは夕食会を開き、直接入居者の方に生活の様子を聞き、スタッフやアルバイトの方との親睦を深めました。渋谷区内のGH2か所を見学したので、その印象学びとなった点などをまとめました。

訪問したGHには、比較的若い男女のメンバーも暮らしていました。スタッフは皆親切で共感的でした。GHのスタッフが作った朝食と夕食をとり、自分の洗濯は自分で行なっています。全員が家賃と食費をGHに支払っています。スタッフとメンバーは、政府から支払われる助成金から給与や手当を受けており、内容によっては医療も無料で受けられます。政府は定期的に制度を見直し、規定は非常に厳格です。健康管理にも注意が払われており、毎日の体温や血圧の測定、服薬管理、歯の健康や衛生チェックが行なわれています。定期的な健康診断も実施され、保護者にも情報が共有されています。食事のメニューは、入居しているメンバーの年齢に合わせ調整されています。

精神障がいの方のGHは、さまざまな理由で後天的に障がいがある人々のためのGHでした。ここでは、服薬管理、金銭管理、書類手続き、通院同行、社会復帰支援といったサポートシステムが整っていました。

私たちは、GHを持続的に運営するうえで生じる課題について、以下の点で理解を深めることができました。人員不足・知識不足・メンバーとの意思疎通の難しさといったスタッフに関する課題・入居者の高齢化への対策等です。興味深いことに、私たちが出会ったすべてのGHのメンバーは、自立に近い形で自分たちの生活に幸せを感じていました。それぞれのGHで共通していたことは、障がいの特性に関係なく多様なニーズに応えられる支援をそれぞれのGHが行っていたことです。GH職員の役割について学びの多い見学となりました。

●研修まとめ アヌーシャ・フェルナンド

私たちは、これまでスリランカでGHの概念や、持続可能な運営に関する経験も知識も持っていませんでした。しかし、今回のインターンシップは非常に有意義な経験となりました。新たな知識や技能を身につけ、多くの方々と出会うことができました。ほとんどの目的を達成し、訪問したそれぞれのグループホームで異なる学びを得ることができました。特に、GHでの生活を通して、障がいのある方々の支援方法、食事や調理の管理、日中活動、保護者とのコミュニケーション、休日の計画、スタッフの役割や記録の取り方など、実践的な知識を学ぶことができました。自分たちの強みと弱みを見つけることができ、今後どのような知識や技能をさらに高めていく必要があるのかを明確にすることができました。今後スリランカでのGH設立プロジェクトにおいては、ぱれっとの皆さまの専門的な知見をお借りしたいと考えています。改めて、私たちの学びの力を高め、課題を前向きに乗り越え、目標達成へと導いてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

●今後の方向性

余暇から就労、暮らしへと、その時代のニーズに即しセクションを立ち上げてきたぱれっと、スリランカも同じ歴史を辿っています。GHを暮らしの選択肢としてどう捉えるか、ぱれっとの理念をどう伝えるかが鍵となりそうです。サハン・セバナの親から土地提供の申し出がありました。GHで働きたいと言っているスタッフもいます。GHの概念についてはスタッフ・親とは共有しました。ぱれっとでも行なった「自立」をテーマとした勉強会をスリランカで行なう必要があるように感じています。

（PIJ代表 相馬宏昭）